

## 「略奪者の手から救い出された」

副牧師：松坂 政広

＜士師記 2章16節～22節 新共同訳＞

**主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救いだされた。**

しかし、彼らは士師たちにも耳を傾けず、他の神々を恋い慕って姦淫し、これにひれ付した。彼らは、先祖が主の戒めに聞き従って歩んでいた道を早々に離れ、同じように歩もうとはしなかった。主は彼らのために士師たちを立て、士師と共にいて、その士師の存命中敵の手から救ってくださったが、それは圧迫し迫害する者を前にしてうめく彼らを、主が哀れに思われたからである。その士師が死ぬと、彼らはまた先祖よりいっそう墮落して、他の神々に従い、これに仕え、ひれ伏し、その悪い行いとかたくなな歩みを何一つ絶たなかった。主はイスラエルに対して怒りに燃え、こう言われた。「この民はわたしが先祖に命じたわたしの契約を破り、わたしの声に耳を傾けなかったので、ヨシュアが死んだときに残した諸国の民を、わたしはもうこれ以上一人も追ひ払わないことにする。彼らによってイスラエルを試し、先祖が歩み続けたように主の道を歩み続けるかどうか見るためである。」

---

＜メッセージ＞

主題 主のあわれみは尽きることがない！

モーセの後継者ヨシュアがその使命を全うして召される20年、30年の歴史を描いたヨシュア記が勝利の書であれば、ヨシュアの死後、サムエルという指導者を主がお立てになるまでの200年の歴史を描いた士師記は失敗の書と言われたり、士師記は、イスラエルの歴史の中で最も暗い時代であったと言われたりします。士師記というのは、混沌とした時代を描いていますが、そこに12人の士師たちが登場してくる背景、前提に、次の言葉があります。

「それで、イスラエル人は主の目の前に悪を行ない、バアルに仕えた(2:11)。」  
それで、というのは実に意味深ですね。1節前に「主を知らず、また、主がイスラエルのためにされたわざも知らないほかの世代が起こった。」とあって、知らない！という

ことがどれほど大きいのか！それゆえに、彼らは主の目の前に悪を行ない、バアルに仕えたというのです。命と幸い、死と災いを備えられた主が、あなたは命を選びなさい。と言われました。前者は、主を愛し、主の道を歩み、主のみこころに生きること、後者は、他の神々を拝し、仕えることを意味しました。そのことが、次の世代に、そのまた次の世代に兎にも角にも伝えられなければならなかったのです。

そのとき、主はさばきつかさを起こして、彼らを略奪する者の手から救われた（2：16）。というのが、今朝注目させていただいている恵み深い主がなさったことです。

他の神々に仕えた彼らは苦しみました。そんな彼らを主は、さばきつかさを通して救おうとされました。彼らのうめきをきかれた主は彼らをあわれまれました。この主のあわれみへの信頼が信仰だというのが、今年の Easter の礼拝メッセージでしたね。

イスラエル人が主に叫び求めたとき、主はイスラエル人のために、彼らを救うひとりの救助者、カレブの弟ケナズの子オテニエルを起こされた（3：）。最初のさばきつかさオテニエルは、救助者と呼ばれています。主の霊が、彼の上であって、40年の間国は穏やかであったということです。

最初の士師、オテニエルが息を引き取ると、イスラエルの民は主の目の前にまた悪を行ない、18年の間、苦しみの中から主に叫び求めると、二人目の士師、救助者エフデを主は起こされ、国は80年の間、穏やかであった（3：30）ということです。

主よ。あなたの敵はみな滅び、主を愛する者は、力強く日がさし出るようにしてください（5：31）。三番目の士師、シャムガルの後、主は女預言者で裁判官であったデボラと統治者であったバラクを士師としてお立てになりました。二人の確信に満ちた祈りがこれです。国は40年の間穏やかに導かれました。

イスラエル人はまた、主の目の前に悪を行なったので、主は7年の間、彼らをミデヤン人の手に渡されました。ミデヤン人は、約束の地に入って行ったイスラエル人と敵対し、彼らにバアル礼拝をもたらしめました。デボラの後、主が起こされた士師、ギデオンに主の使いは、「勇士よ。」と呼びかけました。12部族のひとつマナセの中で一番弱い分団の、その中で一番若かったギデオンにです。主が選ばれる人はそういう人です。望みが絶たれそうになる中で、神の力は、その最も弱いところに現れるのです。主に導かれたギデオンが最初に実行に移したことが、父の雄牛、7歳の第二の雄牛を取り、バアルの祭壇を取り壊し、アシェラ像を切り倒した（6：25）でした。

ギデオンという指導者は、謙遜の限りを尽くして自らに対して怒る人たちを和らげることをしたかと思えば、冷淡な人たちに辛辣なことばを履いたりもしましたが、いずれもが、自分が治めているのではないという確信からであったようですね。主があなたがたを治めます（８：２３）。

ところが、イスラエル人は、周囲のすべての敵から自分たちを救い出した彼らの神、主を心に留めませんでした（８：３４）。主を心に留めなかったとは、記録することも、記念することも、思い出すことも決してなかったと言っているのですね。すべてのことには理由があって、良きにつけ悪しきにつけ根拠がありますね。士師記は、終始そのことを問題としているように思われます。

最後に登場してくる士師サムソンは、「彼は主が自分から去られたことを知らなかった（１６：２０）。」サムソンにはそういう経験がありました。異国の女性と戯れる彼は、祈りのうちに神と交わることを忘れ、召されていることの自覚も失っていました。

ですから、冒頭で申し上げたように、士師記は、２００年のうち４分の３は国が穏やかであったというのに、ですね、くりかえし神と祈りのうちに交わることを忘れた歴史だったんですね。けれども、あるいは、それだけに、士師記ほど、神さまのあわれみを描き切っている書簡もめずらしい！のではないですか。主のあわれみは尽きることがない！驚くほどにです。

それは、子どもがどんなでも、決して見捨てることをしない親であれば、あるいは、親がどんなでも、決して見捨てることをしない子であれば、少しぐらいは、理解が及ぶかもしれないですけれども。

自分には、たくさんの傷跡がある！と思って生きてきた方が、失望落胆する時、いつも決まってあれこそ悩んでしまうといいます。過去に味わったこともいろいろと蘇ってきて、荒れ模様の人生から抜け出せないでいました。ところがです。傷跡をかかえて、いかに生きていくかを考えていた時、神さまが思い出させてくださったことがあった、というのですね。それは、傷は、完全に治るまで、傷跡にはならない！（×２）傷跡ができていながら、傷は癒えてきている！のですね。あなたは、傷跡をどのように見ますか？受けた傷のしるしと見るか、それとも、崩壊した状況に神さまが介入してくださったしるしと見るか？自分で見方を選べるのだとその方は理解しました。自分の傷跡を見て、痛み悲しみを思い出すこともできれば、わたしたちを忍耐をもって回復させてくださる神さまのあわれみを信頼することもできるのですね。そのどちらも可能です。

死の床というのは、あるいは、人生で最も叫びたくなる瞬間であるのかもしれませんが。第二次世界大戦のさ中に死を迎えた、20世紀を代表するピアニスト、ラフマニノフが、死の床に伏して、「もう、これで手がだめになる」とつぶやいたそうですけれども。

どうでしょうか。わたしたちが病の床について、死んだら、天国に行けない！と思ったら、これほどの恐れはないかもしれないですね。その恐れの原因は、自分が罪深すぎるから。そんなふうに告白された方の救いは、苦しみの中、あわれみ深いお方に叫んだことでした。

わたしたちの天のお父さまは、両手を広げてわたしたちを迎えてくださいます。と聞かされても、いいえ、もう遅すぎます！と心配しているこの方に、イエスさまは、ご自身の横で、十字架にかかっている盗人をお赦しになりました。それは、わたしたちも同じです。と聞かされて、再び神さまに迎え入れられた、迎えられていることを知ったこの方は、大きな平安に包まれました。あわれみ深いお方に立ち返るのに、遅すぎることはありません。固く閉ざされた心の扉が開かれて、神さまの赦しを受け取れるよう、その瞬間がいつかはわたしたちにはわかりませんが、主は、導いてくださいます。